
僕は女の子が嫌い

ねぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は女の子が嫌い

【Nコード】

N7445T

【作者名】

ねぎ

【あらすじ】

今年で三年となった相馬一樹。

彼は小学生の頃、女子からのいじめを受け、女性不信となっていた。普段は幼なじみの篠原朝也達と一緒にいて、学校側からは不良生徒と呼ばれている。

今年のかかり決めの時に同じクラスの、楠木沙耶と一緒にクラスの委員長をやる事になってしまう。

そんな事をしているうちに、一樹の女性不信も段々と良くなって来るが

、朝也達にとって、それは一樹がいなくなる事を意味していた。

プロローグ（前書き）

暇だったらどうぞ。

ちよっとタグとは違う話になってしまいかもしれませんが、頑張ります。

ブローグ

まだ日が登る前に目が覚めた。

部屋の中はカーテンを開けているのに薄暗く、携帯の時計は午前五時をしめしている。

まだ全然寝足りないが、新年度早々遅刻する訳にもいかない。

僕は眠い目を擦りながらベッドから這い出し、制服を手にとった。

僕の通う高校は家からは遠く、電車で一時間半も掛かる。そのため、朝はこうして早起きして行かなければならない。

母親はまだ寝ていて、父親は僕が学校に着く頃に帰ってくる。

洗面所で顔を洗ってから居間にいくと、姉の結衣ゆいが朝食を作って待っていた。

「おはよ、姉さん」

「おはよう、早く食べちゃいなさい」

言われるがままにテーブルに着き、湯気が立つ米を口に運ぶ。

姉さんの作るものはなんでも美味しい。

朝食を食べ終え、葉を磨き、時間を確認してから家を出た。

自転車を漕いで駅まで行き、ホームで文庫本を読みながら電車を待っている、いつもの女の子が僕の近くに来了た。

名前は知らないが、僕の通う高校の制服を着ている。

彼女は満員電車なのをいい事に、時々僕の体を触って来る。

情けない事に、僕は一度もまともな抵抗をした事がない。

一緒のクラスにならなければ良いのに。

そんな事を考えていると、やがて電車が来た。

我先にと大勢の人が電車に駆け込み、あつという間に車内はすし詰めになる。

だが、こんな事は日常茶飯事で、別になんとも思っていない。

「……っ!？」

いつものあの手が僕の臀部を捉え、優しく撫でて来る。

もう片方の手がブレザーをめくり、ワイシャツ越しに脇腹を揉みし
だく。

今日こそ捕まえて突き出してやる。

電車が停止し、中にいる乗客全員が揺れ、彼女の手が一瞬僕から離
れる。僕はその隙を見逃さなかった。

瞬時にその両手を掴み、放すまいとぎゅっと力を込める。

必死に暴れて僕の手から逃れようとするが、所詮は女の子。力で負
ける訳がない。

学校の最寄駅が近くなって来たその時、誰かが僕の耳に息を吹きか
け、そのせいで全身の力が抜け、彼女の手を放してしまった。

電車の扉が開き、サラリーマンの間を縫ってホームへ降りる。

目の端で彼女が走って行くのが見えた。

まあいいや。どうせ後一年だ、我慢しようじゃないか。

僕は人ごみの中、小走りで駅を後にした。

第一話：委員長（前書き）

すいません遅くなりました。

第一話：委員長

いつもより一本早くしたせいか、昇降口には生徒は誰一人としておらず、強化ガラスに貼り付けられた新クラスの名簿をじっくりと眺め、上履きに履き替えて階段を上った。

階段を上り切り、三年C組と書かれた教室に入る。当然誰もおらず、自分の席を確認してからそこに鞆を置いた。

「ふう……」

早く皆来ないかと窓の外を見る。だが、今だ人影は見当たらない。当然だ。なんせまだホームルームが始まるまで一時間もある。

僕みたいな奴はそうそういないだろう。そこでふとある事に気付く。

今朝のあの娘はどうしたんだろう。

しかし、そんな事はすぐに頭から消え去り、今年で最後になる学校生活を想像してみる。

いつものあの三人がいるこのクラス。楽しくなりそうだ。

そこで、教室の前の扉が開いた。

「たのもー！」

道場破り風に現れたのは朝霧宗太。あさぎりそうた僕達四人の中で一番体力もあり、運動神経では去年同じクラスだった健吾けんごを除いて右に出る者はいないだろう。

「おはよ」

「おうっ！？なんだいたのか一樹。俺が一番だと思ったのに」

「残念だったね」

そう言っ自分の鞆を軽く上に投げ、それを拳で弾き、見事自分の席に乗せる。

宗太に拍手を送ると、左ポケットが震えた。

僕はそこから携帯を取り出し、耳に当てる。

「もしもし？朝也？」

電話の主は、僕達のリーダー的存在の篠原朝也しのはらあさとだった。

「どうしたの」

『なんだか知らんが電車が止まった。先生に遅刻すると言っ
てくれ』

「わかった」

携帯をポケットにしまうと、何時の間にか外に出ていた宗太が帰
ってきた。

「誰からだ？」

「朝也、遅刻するって」

「新学期早々遅刻かよ」

「違うよ、電車止まったんだ」

「へえ」

宗太も朝也と同じ線を使っているのだが、今日は一緒に登校しな
かったのか。

「皆おはよー！」

教室に入ると同時に彼女が投げた鞆は僕の後頭部に直撃した。

「痛っ！」

「ごめん、外した」

幼なじみの西條結乃さいじょうゆのは床に落ちた鞆を拾い上げ、くすくすと笑っ
てみせる。

「そっついや朝也は？あいつも同じクラスのはずだけど」

「朝也は遅刻するってよ」

「そ」

やがて担任がやって来て、何故か指名された僕が号令をかける。

「篠原はどうした？」

「遅刻です。電車が止まったらしく」

宗太も結乃も何も言わないので、僕が答える。

「そうか」

すると、教室の扉が勢いよく開いた。

「出席番号素数の八番目、篠原朝也！遅刻しました！」

「あ、噛んだ」

走って来たのか、その整った顔は汗ばんでいる。

「先生！今朝メロンパンを加えた女の子とぶつかりました！」

「朝からメロンパンか、胃がもたれるぞ、それより遅延表は」

「ここに」

胸ポケットから小さな紙切れを出し、それを教卓に置いて僕と結乃の間に座る。

「さて、篠原も来た事だし、係りを決めるぞ」

そう言って黒板に係りと委員会の名前を羅列する。

どの学校も同じだと思うが、必ずどちらかに入らなきゃいけない。去年も一昨年も担任が持つている授業の係りになり、毎朝ホームルームが終わったら聞いていたものだ。

しかし、今年はそうは行かなかった。

「委員長は相馬君がいいと思います！」

窓際の席の娘がそう言うと、周りの生徒も次々とそれに賛成し出す。

「ちょ、ちょっと！」

「こりゃ、委員長は一樹だな」

「朝也まで！」

「諦めろ、一樹」

頼りにしていた二人に裏切られ、残った結乃を助けを求める様な目で見つめる。

「じゃ、委員長は一樹に決定ね」

「……………解ったよ」

「大丈夫だ、そんなに大変ではないし、放課後もちゃんと時間はあるぞ」

担任の言葉は僕にとってはなんの慰めにもならなかった。

続いて副委員長はというと、結乃の前にいた、いかにも上品そうな女の子が手を上げた。

他にはなりたい生徒などおらず、副委員長は彼女となった。

他の三人はそれぞれ別の係りに着き、放課後となった。

生徒が少なくなつて来た所で教卓に貼られている座席表を見に行き、副委員長のあの娘の名前を確認する。

楠木沙耶くすのぎ しゃや。ふりがながなかったら読めなかったかもしれない。

「はあ……」

「どうした？コーヒー飲むか？」

無神経な宗太が僕に缶コーヒーを差し出す。

「どうしたもこうしたも無いよ！」

「なんだよ、いきなり」

「だって副委員長女の子だよ！？」

「ああー成る程な」

ようやく事態を理解した宗太がポンと手を打つ。

「すまん、こんな事になるとは思わなかった」

「もういいよ……」

力なく項垂れ、教卓の側面をバンバン叩く。

僕は小学生の頃に、男らしくないだかそんな理由で同じクラスの女の子にひどいいじめを受けた。

最終的に皆がなんとかしてくれたのだが、それ以来僕は結乃と身内以外の女の子が怖くなり、話すのもままならない。

「よう一樹、遊ぼうぜ」

「…何して？」

いつまでも悔やんでもしょうがないので、僕は顔を上げて答えた。

「そうだな……」

朝也は手を顎に当てて思考を開始する。僕達三人はそれをただじつと待つ。

「帰るか」

「ええ！？自分から言つて何それ！？」

「うるさい！気分が変わったんだ！」

その後三人で何か出来る事を提案したが、朝也に全て却下された。

家に帰っても特にやる事は無いので、ご飯食べてお風呂入って寝た。

それから三週間が経ち、五月のはじめの方に控えた体育祭が近づき、体育祭に出る種目を決める事となった。

一年生の頃から存在感が強かった僕達は体育委員の判断により、スムーズに決まり、僕達はそれに従った。

あえて言うのなら、僕と結乃は小柄で足が割と速いので障害物競走、宗太は力を必要とする綱取り、朝也は100m走十一秒という記録を持っているので、すぐに選抜リレーのアンカーとなった。

見事なまでに四人とも特に練習を必要としない競技なので、いつも通り放課後は皆と話していると、あつという間に体育祭当日となった。

第一話：委員長（後書き）

悪い所あつたら教えて下さい。

第二話：蟻り

「相馬君の事が…好きなの」

まだ誰もいないと思っていた教室に、彼女はいた。

ボーッとしている時に突然そんな事を言われても、正直返答に困る。だから僕は聞こえないフリをして教室から出て行こうとした。

「あ、あの…」

小さくなつて上目遣いで僕を見る。僕はそれを一瞥して、教室を出た。

「……………」

さっきの彼女の顔が頭から離れない、何故あんな顔をするんだ。

だが、ここで折れればあの時をまた繰り返す事になる。そんなのは絶対に嫌だ。

今度は騙されるものか。

僕のロッカーに妙な手紙があつたのも、調度今頃だつた。そこには好きとかそういう事は書いて無く、ただ体育館の裏に来てくれただけあつた。

放課後になり、朝也達には用事があると言って体育館に向かった。そこに、彼女はいた。

僕が彼女の名を呼ぶと、いきなり抱きつかれ、見つかる事なんかどうでも良かったのか、大声で泣きじゃくつた。

いきなりなので、何が起こつたのかよくわからなかったが、その時彼女が言つた事は今でも覚えている。

「助けて」と。

その時は、いや、今でもその言葉の意味は理解できていないけど、僕たちは付き合う事になった。

その事を朝也達に話すと、皆は僕らを囁し立てたりしたり、彼女

の誕生日会もやったりした。

そんな楽しい事が続いた一週間後、僕の上履きに、今度は画鋏が入っていた。別段怒る程の事でもないし、初日はそれを無視していたが、日に日にその量は増えて行っただので、僕は毎日上履きを持ち帰るようになった。

そんな日が続いたある日の朝、廊下に出てくる人ばかりを見かけた。何があつたのか聞いてみると、生徒達は口々にこう言った。

「お！変態様のご登場だ！」

「よ！盗撮魔！」

僕は何も言わずその人だかりの中に突っ込み、奥にある貼り紙にたどり着く。

「なに…これ？」

大きめの画用紙に貼られていたのは、彼女と思われる女の子の着替えの写真。その横には――

撮影、相馬一樹。

「ーッ！」

画用紙ごと写真を破き、くしゃくしゃにしてゴミ箱に叩き込んだ。教室に入ると、何人もの生徒がこちらを見てひそひそと何かを話している。

違う。僕じゃない。そんな事は誰も聞いてはくれなかった。

放課後になり、帰ろうとした所に担任に声をかけられ、職員室に連れていかれた。

彼女は立ち止まったと思うと、いきなり僕の頬を平手で打ち抜いた。

「自分が何したか解ってる？」

「違…僕じゃ」

「黙りなさい！もうすぐお母さんが来ます。少し待っているように」
母さんが来るまでの少しの時間に、なんとか誤解を解こうと試みたが、何を言っても無駄だった。

しばらくして、鬼の形相をした母さんが職員室にやって来た。

母さんは無言で僕の頬を引っ叩くと、担任に頭を下げ、駐車場に止めてある車に僕を叩き込んだ。

家に帰っても僕の分のご飯は無く、父さんもずっと黙ったきり、何も言わなかった。

次の日、いつも僕を起こしてくれる母さんがいなかったの、三時間目が始まった頃に学校に着いた。

授業中に教室に入ると、全員の視線がこちらを向く。だが、そんな事はどうでもいい。一つ、確かめなきゃいけないことがある。

放課後になり、教室から出ようとする彼女を捕まえた。とても嫌そうな顔をしていたが、話は聞いてくれるみたいだった。

「あの写真は…本当に君なの？」

もしあの写真が別人なら、完全にあれば彼女の仕業だ。

しかし、本人となると、彼女は誰かに写真を撮られた。つまり、誰か気の強い人が誰かに命令されてやったのかもしれない。

「……………でよ」

「え？」

「近寄らないでよ！この変態！」

彼女はそう叫んで教室を飛び出した。あれが本人なのかどうかわからなかったが、一つ解った事がある。

彼女は、敵だ。

家に帰ると、何やら父さんと母さんが言い争いをしていた。

何故気づかなかった。お前の教育が悪い。

そんなのは全部聞こえないフリをして、いつも通りただいまと言った。今夜は僕のご飯はあった。

お風呂を上がり、さあ寝ようと思ったその時、呼び鈴が鳴った。

「よお、一樹」

玄関の扉を開けると、あちこちアザだらけの宗太が色紙を持って立っていた。

「そ、宗太！？どうしたの！？その傷！」

「ほら、コレ」

「あ、うん」

色紙を受け取り、それを眺めてみる。そこに書かれていたのは、僕を変態呼ばわりしていた生徒達からの謝罪のメッセージだった。その中に、担任のメッセージもあった。どうやら誤解は解けたみたいだ。

「お前を変態って言うやつを片っ端からボコボコにして、それ書かせたんだ。やったの俺だけじゃないぜ、あいつらもだ」

「……ありがとう」

「元気だせよ、じゃあな」

彼を見送った後、わざと色紙を両親の目につく所に置いて、床に就いた。今更そんな事を言われても、僕の嫌な思い出が消える訳じや無い。

女の子なんて、嫌いだ。

「一樹！」

「へ？あ、うわ！」

結乃に抱きつかれ、我に返る。

そうだ、体育祭だ。

「すごい怖い顔してたわよ、何かあったの？」

「いや、大丈夫。頑張ろっか」

ハチマキを締め直し、体育祭に臨んだ。長い長い激闘の末、僕達は勝利した。

これで、僕の人生で最後の体育祭は終わった。少し淋しい気もするが、こういうのは終わりがあからこそ楽しい物で、永遠なんてものはこの世に存在しない。あつてはいけないんだ。

ホームルームも終わり、さあ皆帰ろうという時に、朝也は自分の机で小さな紙とにらめっこをしていた。

「何それ？」

僕より先に結乃が言う。

「ああ、結乃か。悪いが先に帰ってくれないか？」

「手伝おうか？」

「いや、いい。ありがとな」

親友が困っているのを助けられないのは少し悲しいが、本人がいいと言ってるんだから無理に手助けする必要は無い。

「宗太、帰ろう」

「悪い、用事があるんだ。二人で帰ってくれ」

「なに、二人して。別にいいけどさっさと終わらせなさいよ」

「わかってるよ」

珍しく机に向かっていている宗太を置いて、僕達は教室を出た。

「そっいえば」

「ん？」

返事と同時に欠伸が出る。久しぶりに運動したから疲れたのかも
しれない。帰ってさっさと寝よう。

「本当に何があったの？あの時」

「え」

「えーってことはやっぱり何かあったのね、誰にも言わないから言
ってみなさいよ」

昇降口で革靴を持ったまま迫られ、通りすがった生徒がこちらを
見る。

「と、とりあえず靴履いてから」

下駄箱を開き、革靴を取ろうとした所で手が止まる。靴の上に白
い手紙が置いてあった。僕はそれを内ポケットに素早く入れ、靴を
取る。

「で、何があったの？」

「本当に言わないでよ……楠木さんに告白された」

「……そう、断ったの？」

「え、うん」

結乃が一瞬寂しそうな顔をしたので、少し戸惑った。その後は無
言で歩き、結乃の家に着く。

「じゃあね、一樹」

「うん、また明日」

手を振りながら玄関の扉を開く結乃は、どこか悲しそうだった。家に帰り、着替えもせずに手紙を開いてみる。中には小さな紙切れが入っているだけで、他には何も無かった。これが普通だろうけど。

「これは…メールアドレス？」

長ったらしいアルファベットの下には、こう書かれていた。

あの時の返事、まだ聞いていません。ですから、いつになっても良いので、ここに返事を送って下さい。

「…楠木沙耶」

最後に書かれていた彼女の名を読み上げてみる。

なぜ、僕なんだろう。僕以外に男は沢山いるのに、なぜ僕なんだ。僕は彼女に何かしたわけでも無いし、別段異性に好かれるような事は一切していない。ため息を吐きながら僕の腰ぐらいの高さの本棚に、その紙切れを小さく折りたたんで置いた。なんで、捨てずにおいたのかよくわからない。

ネクタイを緩めた所で母親に呼ばれ、階段を降りた。

第三話：約束（前書き）

遅れて申し訳ありません。
色々忙しかった物で。

第三話：約束

一週間ぶりの土曜日。今日は授業が無いから、僕は学校に行く時に降りる駅の近くにある本屋に来ていた。そろそろ勉強しないとまずいかと思ったからだ。かと言って、何をしたらいいのか解らないので、自分の好きな作家の小説を買って店を出た。

そこで数学の宿題がある事を思い出し、早々に駅へ向かうと、見知った人物がいた。

「結乃」

彼女の名を呼ぶと、一瞬驚いた様な顔をするが、すぐにいつもの笑顔に戻り、挨拶を返して来る。

「何してるの？」

「待ち合わせ」

誰と？と聞こうと思ったが、幼馴染みとはいえ、相手は女の子だ。プライベートに立ち入るのはよそうと思ってやめた。しばらくそのまましていると、遠くで電車の到着を知らせるアナウンスが鳴り、それを聞いて歩き出すと同時に、腕を掴まれた。

「一緒に買物いこ」

「え、待ち合わせしてたんじゃないの？」

「いいの、ホラ行こ」

結局言い負かされてしまい、結乃の買物に付き合う事にした。洋服屋やランジェリーショップなどに行くのかと勝手に想像していたが、案外一般的な物で、ただ親に夕飯の買い出しを頼まれただけで、買物はすぐに済んだ。

店から出て僕が家に帰ろうと駅に向かうと、結乃は最後に行きたい所があると言って、駅とは反対方向に歩き出した。

「行きたい所って、ここ？」

「そ、何飲む？」

歩いて五分程で着いた所は、ここらのカップルに人気の喫茶店。僕

達みたいな人が来る場所では無いと人目で解った。おどおどしていると結乃が僕の手を引きながらずかずかと店の中に入り、勝手に注文を済ませる。しかも僕の分まで。

「ねえ」

「は、はい？」

緊張していたせいか、声が裏返る。

「上着脱げば？」

「あ、うん」

言われた通り、上着を脱いで隣の椅子に掛ける。すると再び沈黙が訪れる。耐えきれなくなり、隣の席に目を移すと、偶然キスシーンを目撃してしまい、慌てて正面の結乃に目を向ける。

（なんか一人で馬鹿みたいだ…）

やがて結乃が勝手に頼んだ二人分のホットコーヒーとハムサンドがテーブルに置かれ、二人黙々と食事を始める。

「そういや、前に沙耶に告白されたって言ってたけど、その後どうしたの？」

先にハムサンドを食べ終えた結乃が言い、僕はまだ咀嚼中のそれをコーヒーで流し込み、口を開く。

「まだ返事はしてない、つか何て言えば良いか解らない」

僕がそう言つと、結乃が呆れた様に溜息を吐く。

「あんたねえ、あの子は本気なのよ？良いか駄目くらいハッキリしなさいよ」

「うん…」

そこでふとある事をおもいだした。

「そういや、待ち合わせは大丈夫なの？」

「だ、大丈夫、さっき連絡取ったから」

「そっか」

時計を見ると正午五分钟前。僕が店を出ようと言つと、彼女は素直に従い、それぞれ代金を払って喫茶店を後にした。駅に着くと調度電車が来る頃で、あまり待つ事なく電車に乗る事ができた。

二駅過ぎた所で朝買った小説の事を思い出し、鞆から取り出して読み始めた。次の駅に停車すると、僕と結乃以外の人が一斉に下車し、その代わりに一人が僕らの車両に乗って来る。

「こんにちは、相馬君」

「こんにちは」

僕は小説に目を向けたまま挨拶を交わし、その女性が隣に座るのを気にも止めなかった。

「沙耶も今帰り？」

彼女の名を聞き、一瞬で現実に取り戻される。僕は小説を読むフリをし続けながら会話を耳を傾ける。

「ちよつと学校に要があつてね」

「へえ」

そこで彼女達の会話は途切れ、しばらく車輪が線路を擦る音だけが車内に響く。

「ねえ相馬君」

「な、なに？」

彼女の足が僕の足にぴたりとくつつき、心拍数が跳ね上がる。

「あの時の返事、まだ？」

耳元でそう囁かれ、ページをめくる手が止まる。

「そ、そんな急にじゃ一樹も困るでしょ？」

「急にじゃないよ、今日決めようって言ったのはお姉ちゃんだよ」
「え？」

今、彼女は何て言った？お姉ちゃん？誰が。

「まだ言ってなかったんだね、お姉ちゃん」

再びその言葉を聞き、思わず栞も挟まずに本を閉じてしまう。

「ちよ、ちよつと待ってよ！お姉ちゃんって？楠木さんは結乃の妹なの！？」

「普通に考えればそうなるよね」

電車が止まり、扉が開く。自分の降りる駅でも無いのに、僕は電車を飛び出した。

第三話・約束（後書き）

次からは早めに投稿できるように努力します。

第四話：真実（前書き）

皆さんも夏風邪に注意して下さい。

第四話：真実

学校に来て三つ目の授業は数学だった。全くやる気が起きないので、教科書も開かず窓の外を眺めていると、よそを向いているのが気に食わなかったのか、数学教師独特の法則から外れて僕を指名する。別段数学は苦手という程ではないが、黒板に書かれた問題を瞬時に解ける訳では無い。チョークを持たずにただ突っ立っていると、やがて教師はわなわなと震え出し、僕を席に帰した。怒るならやらせなきゃ良いのに。その後もふてくされながらもずっと外を眺めていたが、僕の名前が呼ばれる事は無かった。チャイムが鳴り、号令を掛けると同時に教室を出ようとすると、直前の所で宗太に肩を掴まれる。

「一樹、次体育だぞ、どこ行くんだ」

「保健室」

これは勿論嘘だ。だが、それを悟った宗太は何も言わずに頷いてくれた。廊下に出て、生徒が少なくなった所を見計らい、一気に階段を駆け上がり、立ち入り禁止の札も乗り越える。考え事をする時は一人が一番だ。

「ふう……」

日が出ていて暑いので、上着を脱いでネクタイを緩める。妙な意地を張らずに今日は夏服を来てくるべきだったかもしれない。あの日からもう四日が経つが、電車の中で彼女が言った事が今だに頭から離れない。

「冗談だったらいいのにな……」

何となく空を見上げると、誰かが階段を登る音が聞こえた。別に今なら叱られる程度で済むし、僕は隠れようとしなかった。やがて僕の近くの重い扉が開き、その足音の主が僕の前に姿を現す。

「サボりは良くないわね」

「そいう結乃だって制服じゃないか」

僕がそう言うと、結乃は小さく微笑み、僕の隣に腰掛ける。女の子特有の微かに甘い香りが僕の鼓動を速くする。

「あの子の事、覚えてる？」

急にそんな事を言われ、一瞬思考が止まるが、すぐに結乃の言っている事は解った。

「うん」

チャイムが鳴り、グラウンドの方から体育教師の怒鳴り声が聞こえて来る。僕と結乃が欠課だと知ったら彼女はどんな顔をするだろう。

「じゃあ…その子の名前は覚えてる？」

「えっと…」

何故だか思い出せない、あんなに仲が良かったのに…思い出したく無いだけかもしれないが。

「西條沙耶」

「え？」

西條という苗字は探せば見つかるだろう。僕が本当に驚いたのは名前の方だ。漢字がどうだかまだ解らないが、この名前が彼女の物だとしたら。

「一樹、全部あんたの思った通りよ」

その時、僕の中の何かが切れた。

「じゃあ…じゃあ何で僕に告白なんてしたんだ！また嫌がらせするのかよ！もう沢山だ！」

屋上にいる事なんて忘れて大声で怒鳴ってしまう。やがて怯える結乃を見て我に返り、呼吸を整える。

「…ごめん、結乃に言っても仕方ないよね」

一言謝り、思わず距離を取ってしまう。しばらくすると結乃は立ち上がり、落下防止用のフェンスまで歩き、振り返って僕を見る。

「あの日、あの子は…沙耶は自殺しようとしたの、何故だかわかる？」

「…わからないよ……そんなの」

僕がそう答えると、結乃はフェンスを掴み、空を見上げる。

「一樹に……嫌われたから」

その言葉を口頭に、結乃は全てを語り出した。

沙耶の様子がおかしくなり始めたのは、一樹と付き合い始めて調度三日の事だった。最初は一樹が何かしたのかと思ったが、楽しそうにしている所を見ると、どうやら違うらしい。またお母さんかと思えば、そうでも無かった。思い切って沙耶に直接聞いてみても、何も言ってはくれなかった。自分の勘違いだと思い込み、安心していた次の日、廊下に相馬一樹と書かれた下着姿の沙耶の写真を見かけた。しかも一枚だけで無く、何枚も何枚も張り出されていた。悲しい事に、これを一樹以外の誰かが撮ったのだと解ったのは、自分を含め三人だけで、授業も出ずに写真を剥がして回った。

放課後になり、五人まとめて職員室に呼び出された。写真の事は一切触れず、ただ授業をサボるな。という事だけだった。あたしはそれを聞きながら、ずっと一樹と沙耶の方を見ていた。三人の方の説教が終わり、入れ替わりに一樹の母親らしき人物が職員室に入っていくのが解った。何とか誤解を解こうと声をかけようとしたが、恐くて口が開かなかった。教室に戻り、自分のランドセルを探していると、誰かが凄い勢いで階段を登って行くのが見えた。頭ごなしに怒鳴ってやろうと思い、あたしは後を追った。階段を二回程登り、辿り着いたのは屋上だった。初めて見る景色に圧倒されながらも、あたしはさっきの子を探す。が、どこにもいなかった。諦めて帰ろうかと思ったその時、フェンスを叩く様な音がして、あたしは振り返った。

「沙耶！」

あたしはフェンスをよじ登る沙耶を叩き落とし、怒鳴りつけようとしたが、出来なかった。何故なら、彼女が今まで見せた事の無い涙を流していたからだ。すぐさまハンカチで顔を拭き、沙耶が落ち

着くまで待った。

「何でこんな事してたの？」

至って冷静を装い、ドスの効いた声で言った。返答次第では本気で殴るつもりだ。しかし、そんな事にはならなかった。

「一樹君に…嫌われちゃった……」

「え？どういう事…って泣かないで」

しどろもどろになりながらも、沙耶が話してくれた事をまとめるようになる。

あの写真は沙耶の担任の田島という女教師に撮られた物で、それをあたかも一樹が撮った様に見せかけ、二人を仲違いさせようという魂胆だった。しかし、途中で計画が沙耶に見つかったが、それが仇となった。田島は、やらなかったら成績を最低にすると脅し、沙耶に一樹に嫌われる様な事を言わせたらしい。

「許さない……」

親友を盗撮魔に仕立て上げ、妹をこんな目に合わせた田島を。あたしは生まれて初めて本気で怒った。帰るところになって両親に連絡が入ってないか気になり、急いで家に帰ったが、もう手遅れだった。一樹の母親がうちに謝りに来たらしい。それで元々仲の悪かったあたしの両親は、こんな変態の男に近づく様になったのはどっちのせいだ。と言い争いを始め、最終的に、離婚する事になった。近々するだろうと思っていたから、別段驚きもしなかったが、本気で驚いたのは父親の言葉だ。

「沙耶は、俺が育てる」

結局あたしと沙耶は離れ離れとなってしまう、沙耶は、西條沙耶から楠木沙耶となった。この事を担任の先生に話すと、田島は次の日からいなくなった。後から聞いた話だが、付き合っている二人に苛立ったとの事だそう。しかし、田島がいなくなっても沙耶が言った事は取り消せないし、一樹に嘘だと言っても信じないだろう。そう思っ、あたしはギスギスした空気の中、ただ黙っている事しか出来なかった。

「…ごめんなさい、今まで黙ってた」

気が付くと、僕は結乃の隣にいて、一生懸命走る楠木さんを見ていた。

「いや…ありがとう。これで…元に戻る」

チャイムが鳴ると同時に、一樹は屋上を飛び出した。

「…沙耶を、頼むわよ」

第四話：真実（後書き）

グダグダになってしまいました。
次で最後です。

最終話：再会

教室に帰ると、鬼の形相をした担任が待っていた。走って逃げようとしたが時遅し、後ろを向いた瞬間に襟を掴まれ、簡単に捕まっていた。

「なあ相馬、腹減ったろ。カツ丼でも食いながら話そうや」

「……………はい」

？この後、先に職員室にいた結乃と共に担任、校長、生活指導の先生の三人に午後の授業をフルに使った説教を受ける事になった。

「何なのよ…授業サボっただけで…おまけに廊下掃除しろだなんて」
「文句言ってないで頑張ろうよ」

そして極めつけに、体育教師に学校全ての廊下を掃除しろという指令。久々の重労働だった。

「そっぴや結乃」

廊下掃除を終え、怒りを露わにした結乃に声を掛ける。

「ああ!？」

「楠木さんのアドレス解る？」

結乃の覇気に臆する事なくそう言うと、素直に結乃は携帯を出して、僕に教えてくれた。

放課後になると同時に、僕は教室を飛び出して校舎の裏に向かった。

（落ち着け…落ち着け僕）

ここに来てから心臓の鼓動が速くなってから全く遅くなる気配が無い。ただ女の子に一言謝るだけなのに、何故こんなにも緊張しているのだろうか。

「ごめんね、待った？」

「い、いや、全然」

彼女が来て更に鼓動が速くなる。しかし、今言わなければいつ言うんだ。そう自分に鞭を打ち、彼女に近づくべく、一歩前へ踏み出

した。

「楠木さん…いや、沙耶…今まで気付かなくてごめん」

「…うん、それで…あの返事は？」

「え？あ、あれは…その…」

僕が顔を真っ赤にして俯いていると、ふいに彼女が抱き付いて来た。

「……久しぶり」

そう耳元で囁き、そっと離れる。

「…じゃあ、帰ろっか」

「うん！」

僕は沙耶の手を引きながら、親友の名を叫んだ。

最終話：再会（後書き）

読んでくれた方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7445t/>

僕は女の子が嫌い

2011年7月24日03時16分発行